

【パネル報告2】

アイヌ語の新しい担い手たち

中川 裕

本シンポジウムのテーマは「二つのミンゾク学」ということだが、私は民族学・民俗学のどちらも専門ではなく、言語学——特にアイヌ語学を専門としているものである。ただ、その関係で現代のアイヌ人のアイヌ語学習活動に関わる機会が多い。そこで、副題の「多文化共生」ということに関連づけて、ここでは「学」について論じるのではなく、アイヌ語継承活動の現状・実態を報告することにする。

アイヌ語はかつて北海道、樺太、千島列島、本州東北地方北部で話されていた言語であり、現在日本国以外では話し手は確認されておらず、日本固有の言語であると言ってよい。しかし、同じく日本固有の言語である日本語との系統関係は認められず、言語類型論的な観点からも日本語とは基本的語順が同じという点以外、共通性は薄い。すなわち沖縄の言葉とは違い、日本語の一方言などではない。系統論的には他の言語との関係が不明な孤立言語とされているが、アイヌ語の周辺には、サハリン・アムールのニヅフ語、カムチャッカ半島のイテリメン語など孤立言語が固まって分布しており、その点では日本語や朝鮮語も同じ立場の言語である。

現在のアイヌ人の人口は、北海道環境生活部が実施している北海道アイヌ生活実態調査の回答者数と同一視すれば、約2万4000人となる。この調査は1972年以来ほぼ7年おきに実施され、2006年に6回目の調査が行われているが、過去5回にわたって数字はほとんど変化していない。

『北海道アイヌ（ウタリ）生活実態調査報告書』における回答者数の推移

昭和 47 (1972)	18,298 人
昭和 54 (1979)	24,160 人
昭和 61 (1986)	24,381 人
平成 5 (1993)	23,830 人
平成 11 (1999)	23,767 人
平成 18 (2006)	23,782 人

しかしアイデンティティを基準としてアイヌ人を規定する限り、実際にはもっとはるかに多いことが予想される。ひとつにはアイヌ人であることを隠している、あるいはこうした調査には応じない人たちが大勢いることが確実だからであり、その背景には差別問題が色濃く立ちだかっている。もうひとつには、上記の調査は北海道内での数字であり、北海道外に移住、あるいは北海道外で生まれてアイヌ人としてのアイデンティティを獲得している人が多数いるからである。それらをあわせた総数がどのくらいになるかは全く不明だが、アイヌ人としての意識を持っている人の数は、一般に考えられているよりはるかに多い。

一方、アイヌ語のいわゆる母語話者の数はごく少数であり、80歳以上の世代で文章がある程度自由に

作れる人が数人確認されている程度である。その意味ではほとんど死語に近い。しかし、アイヌ語学習者の数は確実に増えているし、その学習レベルも上がっている。具体的な数字としてこれを提示するのは困難だが、1997年に設立された（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構（以下推進機構）によるアイヌ語指導者育成事業（以下「指導者研修」）の受講者を例にとってその一端を示すことにする。

推進機構は、1997年制定された「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」——いわゆる「アイヌ文化振興法」に基づき、同法に規定された業務を行うことを目的として設立された公益財団法人である。さまざまな業務の中でアイヌ語に関連する事業としては、次のようなものがある。

- ・アイヌ語上級話者育成事業（1997～）
- ・アイヌ語弁論大会「イタカンロー」（1997～）
- ・アイヌ語ラジオ講座（1997～ STV：札幌テレビ放送局）
- ・アイヌ語指導者育成事業（1998～）
- ・親と子のアイヌ語学習（2010～）
- ・アイヌ語教材作成事業（2010～）

このうち、アイヌ語指導者育成事業は、アイヌ人からアイヌ語指導者を育成するために設けられたもので、報告者は1998年の開設以来、現在に至るまで継続して講師を務めている。毎年10月から12月の3カ月、月1回2泊3日の合宿形式でスクーリングを行い、2年を1期として計18日間の研修を行う。また2年目の4月から9月までは、毎月課題を郵送して通信添削を行っている。1度研修を受けた人は再度参加することはできないことになっているが、さらに研鑽を積みたいという希望が多いことを受け、2010年度から修了生を対象としたフォローアップ講座というものを開始している。

講師は2012年現在7名で、そのうち4名は和人（日本のマジョリティを占める民族）、3名がアイヌ人である。アイヌ人講師のうち2名はもと受講者であり、能力を評価されて講師側にまわっている。受講生数は最大で8名だが、年によって異なる。原則としてアイヌ人かアイヌ人を配偶者に持つ人に限っており、（社）北海道アイヌ協会や首都圏のアイヌ系団体などからの推薦者から人選している。

この指導者育成事業は1998年から始まり2012年度には8期目を数えるが、5期目から積極的に20代・30代の若者を中心に募集をかけるようになった。当初、このように対象を限定すると受講に適した人材がすぐに払底してしまうのではないかと懸念があったが、この10月から開始した2012年度第8期の受講生は過去最高の8名となり、全員が20～30代である上、そのほとんどはすでに一定以上のアイヌ語のトレーニングを受けてきている。

このような状況の背景には、アイヌ語教育を行う機関の増加がある。5期目を開始した2006年当時には、アイヌ人に対するアイヌ語教育を積極的に行っている機関としては、1987年以来続けられている北海道ウタリ協会（現在の北海道アイヌ協会）のアイヌ語教室と、1997年に開始された推進機構の上級話者育成講座を除いては、1998年に開学した苫小牧駒沢大学しかなかった。駒沢大学出身者は5期目において3名がこの指導者研修に参加している。

苫小牧駒沢大学アイヌ文化学生フォーラム

http://www.t-komazawa.ac.jp/faculty/i_culture/haacc/（閲覧日：2013年6月10日）

その後2008年に白老のアイヌ民族博物館において、国の「アイヌの伝統的空間（イオル）再生事業」の一環として「担い手育成事業」が始まった。これは有給でアイヌ語アイヌ文化に関する3年間の研修を行い、実践的活動を通じてアイヌ文化の伝承者を育成しようという事業である。この研修の参加者からはこれまでに6名が指導者研修の受講生となっている。

アイヌ民族博物館 担い手育成事業

<http://www.ainu-museum.or.jp/info/topics/ninaite/ninaite.html>（閲覧日：2013年6月10日）

また、2010年からは、札幌大学がアイヌ人に対する奨学生制度ウレシパを開始した。これはアイヌ人で大学受験資格を持ち、アイヌ文化の研究を志す人に対して、実質上入学金と授業料を負担させない形で入学させる画期的なシステムであり、同大学ではウレシパクラブという組織を発足させ、他の一般学生や学外者をも活動に巻き込む一大プロジェクトとなっている。ここからもこれまで3名が指導者研修に参加している。

札幌大学ウレシパ・プロジェクト

<http://www.sapporo-u.ac.jp/soryo/no120/no120-01.html>（閲覧日：2013年6月10日）

現在の8期生8名のうち6人までがこの「担い手」と「ウレシパ」のどちらかでアイヌ語学習を行っている。

このような大学や博物館等による教育システムの増加に加え、アイヌの若者自身の行動の変化も無視できない。首都圏に住むアイヌ人の若者によって2006年に結成され、東京を中心にパフォーマンス活動を行って2010年に解散したアイヌ・レブルズは、活動期間は短かったが、アイヌに対する一般の関心を大きく惹くことに成功した。彼らはアイヌ語によるオリジナルの歌詞と、アイヌ語で伝承されている早口言葉を取り込んだ、「e=katuhu pirka（君は美しい）」というCDを制作しているが、彼らのメンバーのうち4名が指導者研修に参加しており、ライブではアイヌ語によるラップを試みるなど、アイヌ語による表現活動に大きな意欲を燃やしていた。

アイヌ・レブルズのリーダーであった酒井美直氏は、レブルズ活動時代の2009年に発売された人気ゲーム『ファイナル・ファンタジー XIII』で、4曲のゲームミュージックにボーカルとして参加しているが、そのうちの1曲ではアイヌ語による「4、3、2、1」というカウントダウンを歌詞の一部として吹き込んでいる。レブルズ解散後、酒井氏は『ファイナル・ファンタジー XIII』の作曲者である浜渦正志氏とイメルア（Imeruat：アイヌ語で「稲妻が光る」）という音楽ユニットを結成、アイヌの伝統音楽を一部取り込んだ新しい音楽の創出にかかわっている。

また、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授の北原次郎太氏は、自身がアイヌ人としてアイヌ文化の伝承を行いつつ研究活動を行っている人物であり、指導者研修の3人のアイヌ人講師のひとりでもあるが、彼をブレンとして2009年に20代から30代のアイヌ人16名で結成されたチーム・ニカオッ（ニカオッは「木の実」の意）は、古い記録から舞踊や口承文芸を再構成するという画期的な活動を行っている。このメンバーからもこれまで3名が指導者研修に参加している。

チーム・ニカオッ

<http://www.myspace.com/teamnikaop>（閲覧日：2013年6月10日）

現在、ポピュラー音楽の世界でアイヌ音楽のパフォーマーとして最も活躍しているマレウレウ（アイヌ語で「蝶」）は、旭川出身者を中心とした20代～30代の女性4人組のコーラスグループで、アイヌ人ミュージシャン OKI のバンド内のコーラスユニットとして結成されたが、2010年ころから独立して活動する機会が多くなった。UA や細野晴臣などの著名ミュージシャンと共演もしており、都内におけるライブ活動では、毎回大勢の観客を集めている。そのメンバーである八谷麻衣氏は前述のように指導者研修の受講生を経て、現在は講師として活動している。またマレウレウの別のメンバーも2012年度の受講生として参加している。

マレウレウ

<http://marewrefes.jimdo.com/>（閲覧日：2013年6月10日）

このように、さまざまな活動の中で輩出された人材が、指導者研修という場を集ってきている。推進機構自体は、国と北海道の公的な助成によって運営されている財団法人であるが、こうした動きを作り出しているのはさまざまな草の根的な運動であり、推進機構はそうしたものが集結する「場」としての機能を果たしているのだと考えたほうがよい。

草の根的な活動のひとつとして、指導者研修の講師のひとりでもある太田満氏は、自ら創設した「アイヌ語研究所」というところから2005年に『旭川アイヌ語辞典』を製作・刊行し、ニコニコ動画上でアイヌ語ライブ講座というものを続けている。太田氏はおもに北海道からこの放送を行っているが、インターネットという特性を生かして、首都圏内でもアイヌ人の若者たちによって視聴されている。太田氏はアイヌ語を日常生活の中で活用していくという運動に力を入れている人物であり、アイヌ語を現代生活に適応させるための新語づくりにも意欲を燃やしている。

またYouTubeにアップロードされている、モコットウナシ氏（北原次郎太氏）が実子のスクシ君と製作しているアイヌ語の物語や歌のシリーズがある。たとえばそのひとつの「樺太アイヌのみもふたもない昔話」では、スクシ君が樺太アイヌ語で昔話の朗読を行っているが、モコットウナシ氏は実際に樺太アイヌの血を引いている人物であり、ここでは30代の父親から息子へのアイヌ語の伝承活動が行われているということができる。

YouTube『樺太アイヌのみもふたもない昔話』

<http://www.youtube.com/watch?v=XnJArVljZ5E>（閲覧日：2013年6月10日）

世界の消滅危機言語に対する維持・保存活動の中で、言語形成期に対象言語を獲得したいいわゆる母語話者を増やす試みはほとんど成功した例がない。筆者はそのような達成不可能な目標を掲げるのではなく、本来なら自分の母語になっていたはずだと考える言語を「母語」とし、それを第2言語として学ぶ活動を拡大することこそを言語復興運動の目標とすることを提唱している。上記の若者たちは子供のころには、ほとんどアイヌ語に接する機会がなかった人が多いが、自らの意志で自らのアイデンティティに結びつけてアイヌ語を学んでいる。すなわち、アイヌ語の「母語」話者は確実に増えつつあるのである。

[後記]

この私の「母語」に関する考え方については、中川裕『アイヌ語のむこうに広がる世界』（SURE、2010）で、より詳しく説明を行っているので参照されたい。